

## &lt;前回：アウグスティヌス&gt;

**3. アウグスティヌス****(1) 時代と伝記的事項**

1. 西方教会（ラテン世界のキリスト教→ローマ・カトリック教会とプロテスタント教会の共通のルーツ）における最大の教父(354-430年)、西方教会の基盤の形成。

古代末期＝中世草創期、ヴァンダル族の足音（アウグスティヌスの死後、一年足らずで、ヒッポの町は、ヴァンダル族に占領される）

2. 若きアウグスティヌスと回心
3. アウグスティヌスと二人の女性：母モニカと同棲の女性（妻）

人間性＝両義的存在

原罪とは、アウグスティヌス自身の問題であった。

妻との別れ → 空しさ

「空しさを埋めようとする空しい努力」「いっそうの空しさ」

神の恩寵のみがこの空しさからの救いを与えることができた

5. 古代教会へのヘレニズム的パラダイムからラテン的中世のパラダイムへの転換。  
しかし、「きわめて問題の多いラテン教会の発展に対して責任があるということも疑い得ない」（キュンク、133）。

「西欧の神学における性的な事柄の抑圧」「女性の従属的位置づけ」

「創世記二章によれば女は男から、そして男のために造られた」

↓

「アウグスティヌスは、性的なリビドーに異端の烙印を押してしまった」（135）。

現代にまで。「ベネディクト十六世」

6. 「恩寵の物象化」「西欧的敬虔における予定をめぐる不安」

**(2) 哲学**

4. 認識論・懐疑論

・マニ教への疑問と懐疑思想

・『アカデミア派批判』、確実に存在するもの → 『自由意志論』

自己の存在、物的存在、数学・論理学・哲学などの根本原理

Si fallor, sum.

いかにして真理を認識するか？ 聖書解釈

5. 言語論

・『キリスト教の教えについて』

聖書解釈の基本的概念 → 西欧の言語理論の源泉

教義的解釈、アレゴリカルな解釈（イエスの譬え解釈）

**(3) 神学、異端との論争**

6. 自由意志論、原罪と恩恵論

7. 神の国と歴史神学

**(4) 創造論、哲学と神学、ヘレニズムとヘブライズム**

## &lt;問題&gt;

・ヘレニズムとヘブライズム、存在論と聖書の最初の本格的な接点としてのヘレニズム・ユダヤ教、そのキリスト教への影響

・宇宙論的問題の地平における相互関係→対話と論争の可能性（自然神学）

・ユダヤ教とキリスト教との関係：ユダヤ教はキリスト教の母体である。

キリスト教への多層的・多面的な影響

聖書とギリシャ哲学との関連づけというキリスト教教父の課題の先駆者

### C. アレクサンドリアのフィロン (BC.25-AD.45/50)

#### 8. 二段階創造論：『世界の創造』（教文館）

第一創造物語→可知的人間（人間のアイデア）／第二創造物語→可感的人間（土の塵）  
神の像



キリスト教におけるプラトニズムの受容、聖書のアレゴリカルな解釈の影響。

アウグスティヌスによる創世記注解

### D. アウグスティヌスの創造論

「アウグスティヌス、意志の最初の哲学者」「彼は、生涯、哲学に固執したことによって最初のキリスト教哲学者になったのである」（ハンナ・アーレント『精神の生活 下 第二部 意志』岩波書店、102）。

#### 9. 『創世記逐語註解』（『アウグスティヌス著作集 16』教文館）

「アウグスティヌスも二つのテキストの顕著な相違に気づいている。」「アウグスティヌスはこの箇所を創造についての繰り返しの言葉とは考えず、ここまで暗示的に示してきた創造の二つの異なった時限についての彼の説、つまり創二・三までは原因的理拠の創造について述べているのに対し、二・四以降はこの理拠に基づく具体的事物の創造、展開と述べているとする考えを聖書の言葉に対応させてより詳細に開陳する。」（382-383）

#### 10. 『告白』（山田晶責任編集『アウグスティヌス』中央公論社）第11巻、12巻

「あなたとひとしく永遠なる御言によって、語りたもうすべてのことを、同時にかつ永遠に語りたもう。そして、あなたが生じるように語りたもうすべてのものは生じ、しかもそれは、あなたが語ることによってお造りになるままに生じます。」（7/408a）

「神よ、あなたはこの始原において天地をお造りになりました。すなわち、御言において、御子において、御力において、あなたの知恵において、あなたの真理において、奇しきしかたで語り、奇しきしかたで造りたもう。」（9/409b）

「時間がなかったところには、「そのとき」などもなかったのです」、「あなたの年は、すべてが同時にたちどまっています。」（13/413a,b）

「あなたは、あなたから出る始原において、あなたの実体より生まれた知恵において、何ものか無からお造りになりました。」（12・7/444a）

## 4. トマス・アキナス

ハンス・キュンク『キリスト教思想の形成者たち——パウロからカール・バルトまで』  
新教出版社。

#### 0. トマス・アキナス(1224/25-1323)

1239-44：ナポリ大学の神学生、父の死、ドミニコ会に入会（1244）

1248-52：ケルン。アルベルトゥス・マグヌスの下で学ぶ。司祭に叙任。

1252：神学の教授資格

1256-59：パリ大学神学教授、『対異教徒大全』（1259-64）

1265：ローマにドミニコ会の学校を開く。

1266：『神学大全』執筆開始。

1269-72：パリ大学神学教授（2回目）

1273：12月6日、『神学大全』執筆中断。

1274：リヨン公会議に招聘、旅行途中に、死去（3月7日）。

### （1）13世紀の時代状況

#### 1. スコラの中世（文化総合）の時代：

- ・新しい修道院と大学、12世紀ルネサンス（イスラームからの広範な知の受容）
- ・異端的民衆運動

「アリストテレス」「トマスの世紀であるまさにこの十三世紀に、教育の中心としての修道院が解体され、大学とともにそこで学問が登場した時、この異端の哲学者は画期的な作用を及ぼすことになった」(153)

「大学の法的立場は強固だった」、「大学は独立の団体として、皇帝や教皇の与えた特権にもとづいて」、「托鉢修道会」「説教修道会」、「この修道会は、異端者」「のスタイルで「説教」することによって、逆に異端に対抗し、また教会一般の説教に惨状に立ち向かおうとしていた」、「大学での堅実な研究に力を入れていた」(156)

「十二世紀ルネサンス」「アリストテレスの全体が受容されることによって可能になった」「ヨーロッパの知識人にとって巨大な知の拡大」「自然学、医学、人間論、形而上学の分野でははなはだしかった」「新しい普遍性への関心」(158)

「アルベルトゥス・マグヌス」(159)

## (2) アリストテレスとスコラ哲学・神学

2. 理性の役割の強化：諸権威と諸源泉の相互矛盾から真理へ、理性的な大学の神学。

- ・神学の理性的基盤を明確にする → 理性と信仰をめぐる知の総合
- ・階層的秩序、2階建て、下からと上からの循環構造

「信仰について、もはやただ従来に権威を引き合いに出すというだけではやっていけないのだ。聖書、教会教父、公会議、教皇たち——これらがしばしば互いに矛盾しているのだ。明瞭な答えにたどり着くためには、従来よりもずっと強く **Ratio** (理性) を、そして概念分析を用いざるを得ないのである」、「理性的な大学の精神」(162)

「「神一学」は大学教授トマスにとっても、司教アウグスティヌスにとっても別ではなかった。すなわちそれは、神について責任をもって語ることである。」(163)

「神学全体を開放する方向転換」「被造的なものへ」「理性的分析へ」「学問的研究へ」

「神学に徹底的に理性的基盤を得させるところの方法」(165)

- ・ゴシック的宇宙（文化世界）→ ティリッヒの言う神律

「ゴシック芸術とスコラ学」「単なる「平行性」以上に具体的であるが、しかし博学な助言者が画家や彫刻家や建築家に影響を及ぼさずにはおかない個別的な（そしてきわめて重要な）「影響」よりももっと一般的であるようなつながり」「個別的な影響とは違って、この因果関係は直接的なぶつかり合いによるよりも、むしろ拡散によって生じるのである」、「精神習慣とでもよびうるであろうところのもの広まり」(アーウィン・パノフスキー『ゴシック建築とスコラ学』ちくま学術文庫、37)

ティリッヒの言う「内実」(Gehalt)

3. 二つのスンマ

・「神認識のこの二重の可能性」「神についての真理のこの二つの認識方法」「哲学（哲学的な神認識を含む）と神学は、同じ神について語る以上切り離してはならないが」「異なる仕方でも神について語る以上区別されなければならない」、「哲学が理性的に「下から」、つまり創造と被造物から出発し、神学は信仰的に「上から」、つまり神から出発する」、「互いに支え合っている」(167)

- ・「二つの領域・二つの認識のレベル」「二階建ての建物」(167)

自然と恩寵「恩寵は自然を破壊せずこれを完成する」(gratia naturam non tollit sed perficit)

自然神学→知のコスモス（多様な知識の相互連関の宇宙）、存在の連鎖。

・「神学のために中世的・ローマ・カトリック的なパラダイムの成熟した古典的完成形を造り出した」、「神学全体の新しい構造化」「価値の引き上げ」「本体的にキリスト教的な

ものより人間的なもの」

↓

諸階層の複合体

被造的コスモス／知のコスモス／大学・諸学問

4. 「イスラーム」「の敵対者との対決」「の中に自分があると感じていたキリスト者のために」「護教的・宣教的・学問的な目的設定を伴ったキリスト教的確信の総合的展望」

「自然的理性のレベル」「理性にはすべての人間が賛同するように強いられる」(169)

「神学の「初心者」のため」「教会内的な教育的・学問的な目的設定を持つ手引書」

5. 「スコラ神学は一種の"sic-et-non-Theologie"であって、それはアベラールによってはじめて展開されたものなのである。」(ティリッヒ)

・アベラールの弁証法と「討論」の精神（正規討論、自由討論）

・問と項の区分（構造）

「第X項 AはBであるか。

AはBではないと思われる。そのわけは、

一、(異論一)

二、(異論二)

三、(異論三)

しかし反対に、(反対異論)

答えていなければならない。(主文)

.....

それゆえ、

一 についてはいなければならない。(異論答一)

二 についてはいなければならない。(異論答二)

三 についてはいなければならない。(異論答三)」(川添)

「吟味の精神」あるいは、論理連関と可能性の枚挙。

### (3) アウグスティヌスとトマス

6. アウグスティヌス的パラダイムの内部での修正、プラトンに対するアリストテレス

7. 「アウグスティヌスのラテン的パラダイムを著しく修正した」が「それを解体はしなかった」「アウグスティヌス神学の支配に縛られたまま」(174)

「弱点を共有」

「アウグスティヌスの「心理学的」三位一体論の片寄り」「救済論の狭隘化」「原罪」「煉獄」「恩寵理解の物象化」

8. 「古代人の世界観への依存」(175)

「ギリシア的古代の世界観をほとんどそのまま受け取ってしまった」(176)

「聖書はコスモロジカルに理解され、コスモスは聖書的に理解されるということ」

→ ガリレオ問題

「一つの完全な、神学とコスモロジー、救済秩序と世界秩序のハーモニー」

「中世と古代のアマルガム」(177)

9. 「テストケースとしての女性の地位の問題」(178)

「多くのアウグスティヌスの言明をさらに増幅し、洗練し、それによって女性への低い評価を和らげるのではなく、先鋭化したのではないだろうか」、「女性は男性に比べて「何らか欠けたるものであり失敗したもの」(179)

「女性を司祭に叙階することについて」「禁止されているというだけでなく無効でさえある」(180)

「トマスは女性についての知識を」「アリストテレスに依存していた」、「宿命的な「性別の形而上学」、「性別の神学」に生物学的基礎を提供した人だった」(181)

R=R・リューサー『性差別と神の語りかけ——フェミニスト神学の試み』新教出版社。

10. 「教皇制中心主義の偉大な、そして今日まで力のある弁護者になった」「宮廷神学者」(182)

「グレゴリオス改革的な、全面的な教皇制から導き出された教会像」「神学体系の枠組みの中の教皇主義的教会論」「これがあらゆる点において新しい絶対主義的教会システムと教会的・世俗的な教皇制への要求をイデオロギー的に支えている」(183)

「ローマ・カトリック的なパラダイムの教義学的固定化」(184)

11. 限界

「トマス・アキナスがユダヤ教やイスラームの挑戦との生きた論争の中に立っていたということには何の疑問もない」(185)

「トマスの限界」「十字軍について一言」も語らなかったことである」「彼がイスラームについての非常に退化した知識しか持っていないということ」(186)

『神学大全』の仕事の中断」(188)

「まさにトマスこそ、自分自身の神理解の限界にも常に気づいていた人であった」(190)

12. 中世におけるキリスト教・ユダヤ教・イスラームの相互交流・相互寛容。

イベリア半島の輝き (→ 12世紀ルネサンス)

#### <参考文献>

1. トマス・アキナス『神学大全』全45巻、創文社  
『トマス・アキナス』中央公論社(山田晶→川添信介)。
2. E・ジルソン『中世哲学の精神 上下』筑摩書房。
3. エティエンヌ・ジルソン、フィロテウス・ペーナー『アウグスティヌスとトマス・アキナス』みすず書房。
4. 山田晶『在りて在る者』『トマス・アキナスの〈エッセ〉研究』『トマス・アキナスの〈レス〉研究』、『トマス・アキナスのキリスト論』創文社。
5. 稲垣良典『トマス・アキナスの『神学大全』』講談社、
6. K・リーゼンフーバー『中世哲学の源流』創文社。
7. ハンス・キュンク『キリスト教思想の形成者たち——パウロからカール・バルトまで』新教出版社。
8. 伊東俊太郎『近代科学の源流』中央公論社、『一二世紀ルネサンス』岩波書店。
9. 山内進『十字軍の思想』ちくま新書。
10. ティリッヒ『キリスト教思想史I』(『著作集・別巻二』)白水社。
11. 竹下政孝・山内志朗編『イスラーム哲学とキリスト教中世』全3冊、岩波書店。